

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.2 浅野総一郎像

最初の巡礼地を「本邦セメント工業発祥の地」（東京都江東区）としよう。近代日本にセメント美術が誕生したのも、1875（明治8）年に日本初の官営セメント会社である「摂綿篤（セメント）製造所」にて、当時の工部省技術官の宇都宮三郎が国産セメントの製造に成功したからにほかならない。同工場は1884（明治17）年に浅野総一郎らに売却され、「浅野工場」として新たな一步を踏み出した。同地に現存するアサノコンクリート株式会社深川工場。その車両出入口付近は、「本邦セメント工業発祥の地」として整備され、銅像、フレットミル、明治27年製のコンクリート塊などが置かれている。とりわけ目を引くのが威風堂々たる立ち姿の浅野総一郎の像だ（写真1）。この像は70歳代後半の浅野がモデルで、右手にステッキ、左手に埋立計画図を持つ。浅野の座右の銘である「九転十起」を体現する像として浅野の威容を伝えているのだという。

浅野像は故郷の富山県氷見市など、全国各地に存在する。最古の浅野像は、1924（大正13）年に彫刻家の本山白雲が手掛けたブロンズ像（像高約3m）で、これは現在の浅野中学校・高等学校（横浜市）の敷地内の通称「銅像山」に設置されていた。一般にブロンズ像はその物質的な硬さから、丈夫で長持ちすると考えられている。彫像の原料として金属（特にブロンズ）が好まれる理由は、その堅牢性と耐久性にある。しかしこの浅野像は、太平洋戦争下の金属供出のために1943（昭和18）年に撤去された。現在の同地には1933（昭和33）年にブロンズで再制作された浅野像がたつ。

戦時下の物資欠乏に着目すると、金属とセメントの興味深い関係が見えてくる。浅野学園に近い東亜建設工業株式会社技術研究開発センター（横浜市鶴見区）に所在するブロンズ製の浅野像。この像は1942（昭和17）年に「安善町駅前の埋立記念公園内にモルタル造で建設され」（写真2）、その後「昭和30年代なかば、公園の廃止に伴い構内に移設された」という（『東亜建設工業百年史』、2008年）。「セメント王」と呼ばれた浅野だけに、その肖像彫刻の素材にモルタルが用いられたのだと考えるのは早計だ。実は金属の代用品としてモルタルが選定されたのである。同像が制作された当時の日本は、太平洋戦争を原因とする金属不足の状況にあり、兵器生産に必要な金属資源が払底していた。深刻化する金属欠乏を解消する目的で、1941（昭和16）年に金属回収令が施行され、官民所有の金属類は装身具・鍋・釜・門扉・仏具などあらゆるものが回収された。この政策の一環として浅野学園の浅野像（ブロンズ製）が国家に摂取されたのは前述のとおりだ。

金属不足を解消する代用素材としてセメントが脚光を浴び、昭和戦中期にセメントを原料とする美術作品の研究が進展した。東京美術学校（東京芸術大学の前身）の彫刻科助教授を務めた実績をもつ黒岩倉吉は、「大都市の中心部に代表的な立派なセメント像でも造って『セメントは銅に勝る』と云ふ思想を普及したい」と述べるなど、セメントに対してブロンズ以上の価値を認める芸術家まで登場した（『セメント工藝』第32号、1942年）。

話を戻そう。東亜建設工業株式会社技術研究開発センターの浅野像は、モルタル製であったため、戦時下でも撤去されなかったが、同社の創業 100 周年と浅野総一郎生誕 160 年を迎えるにあたり、2007(平成 19)年にモルタルからブロンズに改鑄された。制作から 65 年を経たモルタル製の浅野像は、経年劣化による傷みが激しかったため、改鑄作業を行う株式会社竹中銅器（富山県高岡市）へ運搬する際には慎重を期した。同社の鑄造担当者によると、モルタル像の内側は「ワイヤー製のメッシュ」で組み立てられていたという。モルタルからブロンズへ新調された浅野像は、元来の設置場所である横浜へ無事に里帰りを果たした。

戦時下ではブロンズに代わる素材としてセメントが使われたものの、経年劣化を迎えたセメントが今度は逆にブロンズに置き換えられる。ブロンズとセメントの両方で繰り上げられる双方向の素材変換が面白い。浅野総一郎の肖像彫刻は、近代国家として日本が辿ってきた歴史を私たちに語りかけている。



写真 1 浅野総一郎像



写真 2 モルタル製の浅野像（『鶴見区史』より）